令和六年六月二十二日(土)午後一時始(開場正午)

公益社団法人 能楽協会

第三十六回 神戸支部自主公演

あじさい能

能 羽衣 和合之舞

狂言 二人大名 他 仕舞

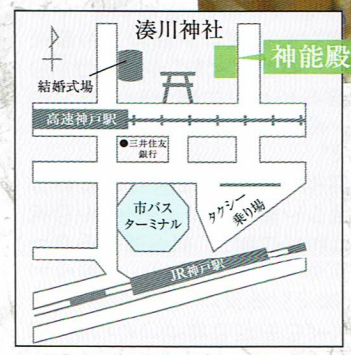
能 清経

主催 公益社団法人 能楽協会 神戸支部

会場 湊川神社 神能殿

神戸市中央区多聞通三丁目一一一

電話 (〇七八) 三七一一一三五八



入場券 全席自由

- 一般前売3,500円
- 一般当日4,000円
- 学生前売1,000円
- 学生当日1,500円

お問い合せ・入場券発売

- 湊川神社神能殿　神戸市中央区多聞通3丁目1-1 TEL.(078)371-1358
- 上田観正会能楽堂　神戸市長田区大塚町2丁目1-14 TEL.(078)691-5449 FAX(078)691-4196
- 出演能楽師

〈お願い〉
◎ 館内でのマスクの着用はお客様ご自身の判断とさせていただきます。
手指の消毒につきましては、館内に機器を設置しておりますので、随時ご利用ください。
◎ 許可のない演能中のビデオ撮影・写真撮影及び録音は固くお断りいたします。
◎ 携帯電話の電源は必ずお切りのうえ、ご入場ください。
◎ 会場内での飲食はご遠慮ください。◎ 病気、その他やむを得ぬ場合の代勤は、ご了承ください。
◎ 天災等やむを得ない理由により開催を中止、延期する場合があります。

◇JR神戸線…「神戸駅」から北へ徒歩約3分
◇阪急・阪神・山陽各電車…「高速神戸駅」下車すぐ
(東改札を出て、右手の階段を上がると正門前です)
◇市営地下鉄山手線…「大倉山駅」から南へ徒歩約5分
◇市営地下鉄海岸線…「ハーバーランド駅」より北へ徒歩約5分

写真提供 ウシマド写真工房

令和六年六月二十二日(土)午後一時始(開場正午)

公益社団法人 能楽協会

第三十六回 神戸支部自主公演

あじさい能

能

清経

清経ノ妻 森田彩子
平清盛 上田顕崇

淡津三郎 江崎欽次朗　大鼓 山本寿弥　小鼓 髙橋奈王子　笛 八木原周平

後見 田中章文　上田拓司
地謡 徳本泰子　竹石宗　梅谷宏　藤井丈雄　森壽子　笠田昭雄　吉井基晴　藤谷音彌

狂言

二人大名

大名 前川吉也
大名 牟田素之
道通り 小林維毅
後見 善竹忠亮　岡村和彦

休憩二十分

仕舞

難波 吉井基晴
班女 大亀藤英
笹之段 藤井丈雄
水無月祓 上田拓司
野守 徳本泰子

地謡 上田嶺貴　藤谷音彌　上田大介　上田宜照

能

羽衣

天人 笠田祐樹

漁夫白龍 江崎欽次朗　大鼓 大村滋二　太鼓 梶谷義男　小鼓 古田知英　笛 八木原周平

和合之舞

後見 笠田昭雄　上田貴弘
地謡 上田嶺貴　岡野八重子　大亀藤英　上田宜照　上田大介　山村啓雄　藤井完治　山田義高

附祝言

終演予定 午後五時頃

清経

平清経の家臣淡津三郎は、ひそかに一人で九州から都へと戻って来ます。

平家一門と共に幼帝を奉じて都落ちし、西国へと逃れた清経は敗戦に次ぐ敗戦に戦の前途を絶望し、豊前国(福岡県)柳ヶ浦で船から身を投げ果ててしまいます。淡津三郎は、その形見の黒髪を清経の妻に届けるために戻ってきたのです。

清経の妻はその話を聞き、せめて討死か病死ならともかく、自分を残し自殺するとはあんまりだと嘆き悲しみます。そして、形見の黒髪を見るのも忍びず、そのまま返し、床に伏してしまいます。

すると夢の中に清経が現れ、妻に呼びかけます。妻がうれしい反面、生きて再び姿を見せてくれなかったと自殺を責めると、清経は形見を返したことをなじり、互いに言い争います。そこで清経は都落ちした平家一門が戦にも敗れ、願をかけた宇佐八幡の神からも見放されて、敵に怯えつつ、西海を漂っていたことや、絶望の中、月の美しい夜更けに船上で横笛を吹き、今様を謡って入水したことを語り、なおも恨み言を言う妻を慰めます。

そして、修羅道の苦しみを見せた清経は、入水の際の十念によって成仏できたことを告げ、消え失せます。

二人大名

野遊びに出た二人の大名が、臨時に太刀を持たせ供にする者を探していると、これから使いに行くという男が通りかかったので、無理矢理に太刀を持たせてしまいます。男は大名に従っていたものの次第に腹がたってきて、大名たちを油断させた上で、不意に太刀を抜き、脅して小刀や素袍を取り上げてしまいます。

二人の大名は男の言うままにして、何とか取り戻そうとするのですが。次第にエスカレートしていく男の要求に一所懸命応える大名は…。

羽衣

駿河国(静岡県)三保の松原のお話。そこに白龍という漁師が住んでいました。今日も釣りを終え、のどかな浦の景色を眺めていると、どこからともなく音楽が聞こえ、いい匂いがしてきます。あたりを見回すと、一本の松の木の枝に美しい衣が掛かっています。そこで白龍が家宝にしようと衣を持って帰りかけると、一人の女性が現れて、呼び止め、それは自分の物だから返して欲しいと頼みます。しかし、女は天人で、その衣は天の羽衣だと聞かされた白龍はそんなに珍しいものであるのかと喜び、益々返そうとしません。

天人は羽衣がなくては天に帰れないと、空を仰いで嘆き悲しみます。そのあまりの哀れさに白龍は、衣を返すかわりに天人の舞楽を見せてほしいと頼みます。天人は喜んで承知し、羽衣をまとい、月世界の天人の生活のおもしろさや、三保の松原の春景色を讃えた駿河舞を舞いながら、天空へと帰って行きます。